
俺と幼馴染みのリア充計画

中空知一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幼馴染みのリア充計画

【Nコード】

N9273Z

【作者名】

中空知一夜

【あらすじ】

幼い頃に両親を無くした少年、一之瀬悠人は叔父に引き取られる事となり、生まれながらの故郷を離れる事となった。

新たに出来た妹と叔父叔母、そして友人に囲まれてなんの不自由なく過ごしていた。

そして高校に入学した悠人はある女の子を気にかける様になる。

周囲と関わりを持つとせず、孤独に生きているオーラ万歳の彼女… 幼い頃引越して別れた幼馴染みの中島柚乃に……

第一話「新たな生活の「コマ」」

恋をするのは簡単だが、その恋を成就させるのは難しい。
まさしくその通りだとおもう。

人を好きになるには、特に何かが必要、といった事も無い事がほとんどだとおもう。

だけど、私は違う。

私は人を好きになつてはいけない人間だ。

あの人との約束を守るために……

小学3年になつたばかりのある日、親父と母さんが事故で他界してしまい、俺は親父のお兄さん、つまり叔父さんに引き取られる事となった。

叔父さんの家は叔母さんと二人の娘さんである女の子の3人家族であり、幸いにも皆俺を歓迎してくれた。

娘さんである女の子、美也子ちゃんも

「わーい？ お兄ちゃんが出来たー？」

と、喜び懷いてくれたためとりあえず新しい家庭では居心地の悪さは感じなかった。

けど、ただ一つ。

あの子と別れる事だけは悲しかった。

家が隣同士で、とても仲が良かった女の子。

いつも二人で何かをして遊んでいた。

しかし叔父さんの家は今の家からかなり離れたところであり、彼女とは必然的にも別れなくてはならなくなった。

そして別れの時、俺たちはある一つの約束を交わした。

――絶対にまた一緒に遊ぶってな。

俺がこの街に引っ越して今日が7年目となる。

今までは人生で最初の難関である高校入試を終わらせ、自由に春休みを過ごしていたため、まだいつもの生活リズムが取り戻せておらず、起き抜けである今、現在進行形で眠気がすごい。つまり眠い。

しかし、今日は寝坊するわけにもいかない、重要なことがある。ふと横を見ると、見慣れない制服が俺の側にたたんで置いてある。そう、今日から俺は高校生となるのである。

小学の時に叔父さんに引き取られてから、何だかんだでかなりの月日が経ったなあ、そういえばよくあの勉強量で高校受かったなー、などと独り者思いにふけていると、ドアをノックする音が鳴った。「悠兄、起きてる？」

叔父の娘さんであり、7年前に新しく出来た妹の美也子の声だ。

「あー、起きてるよ」

「それじゃ入るよ・・・ってまだ着替えてないの？」

部屋に入ってきた美也子は俺をみるなりいきなり呆れた顔をした。どうやら俺が起きてから結構な時間が経ったみたいで、今日から高校に行くのにいつまで経っても起きてこない俺を見にきたのだろう。呆れた顔の中に、こいつは高校に行く気があるのか？といった感情も含まれている気がした。

そして呆れた顔をした妹をよく見れば、こちらもまた見慣れない制服を着ている。

そう、美也子もまた俺と同じで今日から高校生となるのである。

美也子は俺とは頭の出来が違い、今回の試験もかなりの成績で入学したとかしてないとか。

何故そんな頭の出来なのにもかかわらず俺と同じ高校にしたのかと

訪ねたところ、

「家から近いから、ただそれだけだから？」
と答えていた。

血は繋がらなくとも、考える事は兄妹同じというわけか。

「早いな美也子、もう着替えたのか」

「そうよ、はやく新しい制服が着たかったからね」

「そうか、なら俺もさっさと着替えるかな」

「なるべくはやくしてね。ご飯もう出来てるから」

「おう、分かったよ」

そう言くと、美也子は勢い良くドアを閉め、したにおりて行った。
さて、俺もはやく準備しますかね。

新しい制服に身を包み、いつものように朝飯を食べ、高校生として
初の登校を始めた。

美也子は、

「私、友達と一緒に登校するから先に行くね」

と言い、俺より先に家を出た。

やれやれ、兄妹で同じ学校なんだから一緒に行けば良いのに。

昔は俺に懐いてくれていたのに、今では見る影もない。

まったく、女の考えてる事はよくわからん。

と、そんなもはや妹絡みで何度考えたかもわからん悩みを、高校生
になって始めて考えていると、ふと後ろから声を掛けられた。

「よう、悠人」

「おはよう、悠人」

振り返ると、やけにガタイの良い男と、肌が白く、まるで女見たい
な綺麗な肌をしている男が立っていた。

「よう、二人とも」

この二人、二宮健と三浦和人はこっちに引っ越して来てから出来た
新たな友達の二人である。

家が近所で同じ学年でもあり、俺の苗字が一之瀬であり、苗字の頭で数字が並んでいるという偶然もあり仲が良い。

よく、叔父さんからは一二三トリオなんて呼ばれていた。

そして俺たちは、中学、高校と同じ進路を進んだため今日からまた一緒に過ごす事となる。

「それじゃ行こうか？」

和人がそう言うのと、俺たちは揃って新たな学び舎となる高校へ登校し始めた。

そしてその少しあと、今までとは違い高校からは電車通学となるため、始めて通勤ラッシュというものを味わう羽目となった。

正直言ってきつい。

周りを見れば同様に二人もキツそうな顔をして、ひたすらにやり過ぎそうとしていた。

健は体を鍛えているため問題は無いだろうが、和人は見た目通り体があまり丈夫ではない方なので心配である。

和人に大丈夫か？ とアイコンタクトを送ってみる。

すると、だいじょうぶと口パクで帰って来た。

まあ、和人ももう高校生なんだし、大丈夫だろうと思っていたその時、目の前に大丈夫そうでない女の子を見つけた。

よく見れば、うちの制服を来ており、リボンの色から察するに1年生である。

腰まで届くかのようなつややかな黒髪で、その肌は和人よりも白く綺麗で、顔の造形は恐ろしく整った、美人と言うよりは可愛い、守られるよりは守ってあげたくなる、そんな印象を受ける女の子である。

俺は昔、こんな女の子を見たことがあった。

まだこの街にくる前に住んでいた場所での幼馴染の女の子。

その女の子にそっくりであった。

いや、まさかな。

彼女がこんなとくに、ましてやうちの制服を着て登校しているはず

も無い。

ただ似ている、それ以上でもなくそれ以下でもない。

そんな事を考えながら彼女の顔を見ていると、何故か急に顔が強張った。

確かにさっきまでキツそうな顔をしていたが、今の顔は単にキツいだけではなさそうだ。

・・・もしや？

ある一つの可能性を思いつき、思わず彼女の元に進んで行く。
やはりな。

思ったとおり、彼女は痴漢されていた。

よく見れば後ろにいかにも痴漢してますよ、とでも言っている様な挙動不審の男がいた。

そんなに心配ならしなければ良いのに。

つと、そんな事を思っている場合でも無いな。

「おつと、すいませーん」

荒事の嫌いな俺は、わざとらしい声を挙げ、男と女の間に進んだ。

ここで、手を捕まえて、

「この人、痴漢です」

なんて言えばかつこ良いだろうが、それは彼女にとっても迷惑かもしれないしな。

そしてどうやら成功したらしく、男は去って行った。

どうやら自分のしていた事が俺にばれたと思ったのだろう。

そして男が去って行くのを見届けると、彼女は小さな声で

「あ、ありがとう。 悠人君」

と俺に呟いた。

「ん、何が？」

下手に恩を感じさせても悪いだろう、俺は何も知らない様なそぶりを見せ、彼女に返した。

……あれ？ 何であの子俺の名前知ってるんだ？

確か俺はあの子に名を名乗った覚えは無い。

なら何故知っているんだ？

そして彼女に尋ねようとしたが、すでにそこには油ギッシュなサラリーマン風のおっさんしか居なかった。

そして電車が目的地につく頃には、人も大分減っていた。

そういえば、美也子は大丈夫だったろうか？

兄妹という鼻屑目で見ても、美也子は素直に可愛いと思うので、さっきの女の子の様に痴漢などされてないだろうかと考えること2秒、結論が出た。

あいつにそんな事する勇者なんかないかと。

第二話「驚愕の事実」（前書き）

間違えて変更前の原稿を載せてしまったので第一話の内容が変わっています。

そちらを見てからこちらを見ていただけると幸いです。

第二話「驚愕の事実」

朝の通勤ラッシュを過ごしてから少し、俺たち3人はこれから新たな学び舎となる高校に辿り着いた。

私立・奏蘭学園高等学校<俺たちの新たな学び舎の名前である。

勉強の面においても、スポーツの面においても特に特化した事もない、いわば普通の高校である。

生徒数も他の高校と差はなく、通っている生徒のほとんどは家から近いから、などと言う面でこの高校を選んだに違いない。

実質俺もその通りだしな。

入学式を終え、自分たちのクラスに戻る途中、殆んどの新生入生は思っただろう、

うちの校長話がっ？

と。

何だあの校長？ 軽く40分は話続けてたぞ？

2、3年生なんか校長が壇上に上がった途端、やる気をなくしていつてたぞ？

おまけに教頭から

「あの、校長先生？ そろそろ次にいきたいのですが？」

と言われるまで全く話を辞める気なかったぞ？

この学校に来て始めての感謝が教頭とはな。

若干苦笑してしまった。

そして心の中で教頭に感謝しているうちに俺たちのクラスの担任の塚山なる若干若い教師が自分の自己紹介を終え、

「それじゃあ次は皆に自己紹介をしてもらおう」

と言い出した。

出席番号順から考えて俺ははじめの方になる。

このクラスにはどうやら俺より苗字が早いやつが一人しかおらず、俺は2番目となった。

さらにその一人と言うのが、妹の美也子であった。

はじめの方と言う事でそれなりに目立ってしまふのだろうか？美也子と同じ苗字だし、何か聞かれるかもな、などと考えているうちに俺の前の席に座る美也子が自己紹介を終えたらしく俺に順番が回って来た。

若干緊張しながら、昨日の夜考えた通りの文を一言一句間違える事なく喋り席に座った。

ほっ、どうやら失敗はしてないみたいだな。

よく見れば和人も健もそれなりに緊張しているみたいだ。

さらに中学時代の顔見知りもちろほら見かける。

まあ、頑張れ。

自己紹介も残るところあと一人となった。

最早この位になると真面目に聞いているのは少数にかぎられてくる。

俺も和人の自己紹介が終わるのを見届けると少しのんびりとし始め、ウトウトしかけていた。

いかん、眠い。

そして俺が少し睡眠を取ろうかなどと考えていた時だった。

最後の一人であるう生徒が自己紹介を始めた時にそれは起こった。

「織西中出身、中島柚乃です。

よろしく」

簡単とした自己紹介だった。

普通ならその程度にしか感じないだろう。

だが、俺は違った。

織西中学、俺がもし小学を引越す事なく卒業していたら進んでい

た進学先の名前、もとい俺が前に住んでいたところの名前である。
さらに偶然にも朝痴漢から助けた女の子でもあった。

しかしそんな事よりも重要なことがあった。

中島柚乃、俺の昔の幼馴染みの名前、あの約束を誓った女の子であった……。

第三話「幼馴染みの確信」

自己紹介が終わり、休み時間となり、話し終えた塚山教諭が教室を出ていった。

この後クラスの委員などを決めるらしいが俺にとってはそんな事よりも重要な事があった。

中島柚乃、俺の幼馴染だったかもしれない女の子。

おれはどうしても彼女の事が気になっていた。

しかし、昔こそ仲良く話していたが既にかんりの時が流れており、なかなか話しかけられずにいた。

俺のチキンやろう？

しかし、彼女が幼馴染である可能性はかなり高い。

朝の痴漢から助けてやった時、名前を呼ばれたのはそのせいだろうけど、話しかけにくい。

どうしたら良いんだ？

「何一人で女の子見ながら悶絶してんだ？」

ふと、健が話しかけて来た。

それに続いて和人が、

「あの子は確か……そうだ中島柚乃とか言ってたね。どうしたの悠人？ 女の子に興味持つなんて珍しいね？ 健じゃあるまいし」と、訪ねて来た。

「いや、ちよつと気になってな」

とりあえず軽く流しておく。

まだ、あの子という確信も無い、下手に話すより良いだろう。

「まああんなオーラ出されてたら気になるよな」

健が彼女を見ながらふと呟いた。

「確かに、誰も近寄らせないようなオーラ醸し出してるよね」

それに和人も賛成する様に、続いた。

なるほど、俺が彼女に声掛けにくく感じたのはそのオーラを感じて

いたからか。

確かによくみると、皆既に各々のグループなり、集団なりを結成しているにもかかわらず、かのしずっと一人で本読んでいた。時折誰かが話しかけてみるも一言二言で話が終わっていた。それも彼女が一方的に話を終わらせていた。

「あれは本当に人とか変わりたくないんだな」

と、俺と一緒に彼女を見ていた健が呟く。

どうやら俺と同じ事を思っていた様だ。

「ま、いつまでも気にしてもしょうがないから 早く帰ろう」

しかし、俺同様女の子に興味を持ってない和人がそう言ったので、とりあえず家に帰る事にした。

夜になっても俺は彼女の事が気になっていた。

もし、彼女があの子なら俺はどうしたいんだろう？

もし話が出来ても何を話せば良いんだろうか？

そもそも何故こんな所にいるのか？

……だめだ、あまりに考える事が多くて頭がまとまらん。

一度風呂に入ってゆつくりしてからもう一度考えよう。

そう決めた瞬間、突然電話がかかって来た。

見たことない番号だ。

「誰だ？ この番号？」

とりあえず無視するのもあれなのででて見る事にした。

「もしもし？ どなたですか？」

とりあえず訪ねてみる。

すると相手はこう返して来た。

「あ、あの……悠人君だよね……？」

悠人君？

俺をそう呼ぶ人間なんか知り合いにいた記憶が無い。

誰だこの人？

……ん？ 悠人君？

まで、何処かで聞いたぞ？

しかもこの声、絶対何処かで聞いた事ある。

俺がしばらく黙っていると携帯の向こうからまた声が来た。

「私だよ、中島柚乃だよ？」

……そうだ、この声で今朝電車で俺の名前を読んだじゃないか？俺はついさっきまで悩んでいた種からの突然の連絡に動揺しているのは言うまでもない。

だが、どうしても知りたい事、これだけは聞かなくてはいけなかった。

「お前」

そしてどうにか声を絞り出し、一呼吸おいてたずねた。

「……柚乃ちゃんか？」

「懐かしいね、その呼び方も。」

そうだよ、私が柚乃ちゃんだよ。覚えててくれたんだね、悠人君」

やはり、あの子は俺の昔の幼馴染みの中島柚乃だった。

しかし何故、こんな所にいるんだ？

それに、何故お前は俺の携帯番号を知っているんだ。

そもそも何故うちの学校に通っているんだ？

そんな多くの疑問がまた頭をよぎり出した。

すると、彼女がまたたずねて来た。

「あの、悠人君。 今日学校の前に座っていた一之瀬美也子さんって悠人君と何か関係があるの？」

そりゃ気になるだろう。

そうそう一之瀬なんて苗字があるわけなどないし、ましてや同じ学年だ。

とりあえず、頭の疑問を抱えながらこう返す。

「美也子は妹だ。 義理の。 ほら、子供の時親が死んで叔父さんに引き取られただろ？ その叔父さんの娘だったんだ。 正確に言えば従妹だな」

すると、柚乃は

「そっか、従妹か……うん、分かった。それじゃまたね」と、言い電話を切った。

「……って、何にもまだ聞けてねえじゃねえか」

だが、一つだけ確信を持てた。

彼女があゝの約束を誓った幼馴染みであるという事だ。

とりあえず明日学校で話しかけてみよう。

そう決め、とりあえず俺の高校生活一日目は終わった。

やっぱり、悠人君だった。

朝の電車で私を助けてくれたあの人。

顔が小さい頃と対して変わって居ないからすぐわかった。

いや、少しかっこ良くなっていた。

いやいや、かなりカッコ良くなっていた。

背も高くなって、声も低くなって、昔とは全く違っていて確信がな

かったけど、やはり悠人君だった。

それに、一之瀬美也子さんだった？ 彼女も悠人君と何も無くて良

かった。

まさか、こんなに早く再開するとは思ってなくてちょっとびっくり

したけど、この高校にしてよかった。

（早くあの約束を果たしたいな……）

ふと、子供の頃に彼と交わした約束を思い出しながら、中島柚乃の

高校生活一日目は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9273z/>

俺と幼馴染みのリア充計画

2012年1月4日18時27分発行